

2023 清真学園 高校野球観戦記

昨年の夏大会後、主力を担っていた3年生6名が引退。部員数は6名となり、秋は再び合同チームとなった。

新チームの部員数は6名。その中で中学野球経験者は3名。野球の経験の無い中学1年生に教えるような所から、新チームはスタートした。やがて清真中野球部出身の高校1年生2名が加わり部員は8名。4月上旬、新たに野球経験の無い高校2年生が加わり部員は10名。マネージャーも3名に増え、単独チームで夏の大会に出場することになった。

エースは昨年に引き続き川口颯大だが、川口の球を受ける捕手は合同チームの選手だった。昨年も同じような状況だったが、昨年は川口の兄がいた。しかし、今年はいない。

チーム内にキャッチャー経験のあるものもない。そこで、キャッチャー初心者の高校1年の郡に白羽の矢がたった。

130km/h を超える川口のスピードボールは、慣れない選手が捕るとボールの勢いでミットが動いてしまう。ミットが動くと、コースのきわどい球はボールと判定されピッチャーは波にのれない。さらにキャッチャーはピッチャーの配球、守備の指示を考えねばならず、経験の無いものが、すぐ守れるようになるポジションではない。

7月9日は蒸し暑かった。そんな中、行われた麻生高校との一回戦は初回到川口の犠牲フライで清真が1点先制した。私はこの試合、勝ち負け以前にコールドにならず最後まで試合するのは難しいと思っていた。野球経験の浅いものが多く守っている状況では、一つのアウトをとるのも容易ではない。9回まで試合を続けるのは、最低でも24個のアウトをとらなければならない。

初回、川口は136km/h に達する直球を武器に三振を奪っていった。観客席は川口のスピードボールに驚いていたが、私はある危惧を感じた。『野球は一人ではできない。この暑さの中、いずれ球速は落ちる。三振以外でアウトをとる流れにならないと、いずれ大量点をとられ、大差の試合になってしまう。』

しかし、私の危惧を打ち消すプレーが随所にあった。まず2回裏、ファースト後方のフライ。高くあがった内野フライをとるのは結構難しい。このフライ、ファーストの篠塚が目測を誤ったように見えたが、最後にとびつきこのフライを捕った。攻撃でも下位打線がフォアボール選ぶと、それをバントで徹底的に送り、川口につないだ。

中盤には、セカンドの原がライト前のフライを捕ったり、センターの宇井が難しいフライを捕ったりした。キャッチャーの郡もピンチで何度もマウンドの川口の所に駆け寄った。郡が川口に具体的なアドバイスをすることはまだ出来ないだろう。ただ、ピンチの時、郡が駆け寄ることで『僕たちが後ろを守っています。』ということを川口に伝えることができたであろう。

試合は4対8で負けた。しかし24個のアウトを積み重ね、コールドにならず最後まで

戦い続けることができた。

球場を出ると、川口のお爺さんに会った。(川口のお爺さん(藤本忠勝さん)については本校HPの一番下『CHOSHI』をご一読ください) 『颯大は練習が足りないな』と一言。厳しい一言だが、肩の痛みに耐え甲子園で伝説の投手と投げ合った藤本さんから見ると、川口はまだまだと言うことだろう。

今年3年生はいない。久しぶりに夏休みもチーム練習ができ、秋の大会にも単独チームで参加することができる。また清真中野球部の3年生や7月・8月に体験入学に来る他の中学の生徒が加われば、来年は選手層に厚みが生まれるだろう。その舞台上で9回投げきる川口の姿が見られることを期待して、また一年間頑張っていきたいと思う。ブラスバンド、応援団、チアガールの皆さん、大変熱い中応援をしていただき本当にありがとうございました。そして、本日もたくさん来ていただいた清真学園を応援してくださる卒業生や卒業生保護者、関係者の方々、来年もまた球場でお会いしましょう。

(清真学園中学野球部 顧問 押見弘一)